

---

# 世界をはんぶんこ！

伊庭 当

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界をはんぶんこ！

### 【Nコード】

N5598Z

### 【作者名】

伊庭 当

### 【あらすじ】

一緒に世界を征服して世界をはんぶんこしよう。そう提案したのはなんと勇者だった。対する魔王は…物静かな魔王と勝ち気な勇者のファンタジー

## 1話（前書き）

またファンタジーのパロディから始まります。ただ、今回は予定だとちょっと大人しめの軽い長編になるかも…挫折しなければ

## 1話

「私と手を組まない？そうしたら、世界の半分をあなたにあげるわ」

そういい、その少女は自信満々に胸をそらし青年に微笑みかけた。

「……なんだって？」

青年は訝るように目を細め少女を見る。はつらつとした印象を与えるオレンジのポニーテールにすっきりと通った鼻筋、ニンマリとした口元は間違いなく年頃の少女のものだ。普通なら、遊び心から出た冗談と誰もが笑い飛ばすだろう。

……普通の状況ならば、だ。だが禍々しい紋様に彩られた、強大な魔力を帯びた部屋で、ひときわとてつもない覇気を放つ玉座に、世界から大魔王と恐れられる存在が座っている状況では、その言葉は明らかに遊びや気まぐれ以上の意味がこもる。

何より少女の強い意志を帯びたその瞳が、これは本気なのだ伝えてる。

呆れたように青年が問いかける。

「……いくつか、質問があるのだけでも」

「どーぞどーぞ。これから相棒になるかもしれない仲だし」

「相棒って……いやいい。まずひとつ。ボクと君の立場をわかって言っているのか？」

「あなたは世界中から怖がられてる伝説の大魔王ベルクロード。かつこ復活ホヤホヤかつことじ！そして私は人々の希望を背負いその

魔王を退治しにきた勇者・ルミナ様華の16歳！あ、ルミナって呼んでいいわよ」

「ああ、君の持っている剣、それが1000年前にボクを封印したのと同じものだという辺り、君が勇者だということ自体はそうなんだろうな。ボクは、世界の人々から希望を託されて、それを裏切って魔王と手を組もうとする勇者は、初めて見たけども」

「しかも私で最後でしょうね」「二つ目。どうやって？世界の半分を分けるようにも、ボクは復活したばかりだ。おあいにくさま、世界の半分どころか一割もまだ征服出来てはいない」

するとルミナは可哀想なものを見る目でベルクロードをねめつけた。

「どうやってって…うわ察しが悪い。寝すぎてちょっとボケたんじゃないの？」

「寝すぎてまだ夢を見てるんじゃないかなとは思っよ」

「そんなの 私と、あなたで、これから世界を征服するに決まってるじゃない！」 世界征服？勇者と魔王で？そんなベルクロードの疑問が表情に出たのか、問いに出す前にルミナが答えた。

「あなたはかつて、何度も世界全てを震撼させた史上最強の大魔王。復活する度に世界を支配しかけてきた。その魔力はあまりに強大で、敗因は常に伝説に語られる勇者に封印された…たったそれだけ。そして、今回はその勇者が自ら手を組もうと申し出てきた。サイッコの条件じゃない？私、こう見えても腕は立つわよ」

素晴らしい剣を素振りする。しっかりと整った切れのいい剣筋。年に合わぬ実力が確かにあると感じさせるものだった

「……じゃあ三つ目。なぜ、世界がほしいんだ？」

「そりゃあもつ…世界征服はロマンだからよ！」「ろ、ろまん…？」

「それぞれの国の色に塗り分けられた世界地図！その境界線をなくしてすべて私色に染めて、おつきく私の名前を地図一面に載せる！壮大な野望！夢は大きく！それを考えるだけで胸が高鳴ると思わない！？」

ビシッと指を天に指し宣言するルミナ。そのまま手を開きベルクロードの前に差し出す

「だから改めて言うわ…どう、魔王ベルクロード。私と、手を組んでこの世界を征服しない？そうしたら、世界をはんぶんこしましよう！」

## 1話（後書き）

続きは早めに書きたいですが、  
気長に待った方がいいかもしれませ  
ん…

## 2話（前書き）

2話目、出来上がりました。文字数はそこまでではないとはいえ一日に二つはやはり大変ですね



## 2話

「すまないがその話しは……」

と、言いかけたところで突如扉が唸りをあげて一刀両断され、勢いよくまた少女が入ってきた

「今度は誰だい」

「ご無事ですか勇者様！……大魔王ベルクロード！誇り高きシエダル・パトリネツクの後を継ぐグラーダ王国が騎士、ライラ・パトリネツクが相手……だ……」

その侵入と同じように勢いよく切った口上もしかし途中で詰まるというのも、倒すべきその魔王にマイペースに「おお、今回はまともな反応」と感心され、助太刀すべき勇者に「うえ…ライラタイムング悪すぎ…」と苦味ばしったジト目を向けられてはいかな勇猛な騎士でも自分の自信に疑いの視線を走らせても、不自然はない。

「え、え…？私は何か間違えたのか…？」

「いや、間違ってるのはこっちだと思うから気にしないでいいよ」

「せっかくもうちよいでいい返事が返ってきたのに……」

「それは間違えてると思うよ」

すかさずルミナに突っ込みを入れる。その間気を取り直したのかライラが再び剣をベルクロードに向け「ここで会ったが百年目……」  
「はじめまして。百年前は封印されて寝ていたよ。決め台詞が間違

つてた訳じゃないよ」

再び一瞬でくじかれる。

「……勇者様、これは一体どういうことですか？勇者様は確か、魔王との決着は自分一人で行けるからと私たちを置いて一人で先に…」

なるほど、それで仲間がいなかったわけだ、とベルクロードは納得する。

「ごめん、私魔王と手を組むことになったから」

「いや違う」

「勇者様が…魔王と？」

「世界は私たちのものってね！」

「ボクは了承してない」

「手を組んで世界を…」

「あーもうひどーい、昨晚あんなに語り合った仲じゃないのーベルリン」

ベルクロードの腕に腕を絡めようとするがあっさりかわされた。

「お約束だけど昨晚はまだ知り合ってすらいないしボクはそんなどこかの街みたいの名前でもない」

「勇者様…」

「くー、頭の固いやつー。いいじゃんこんな美少女と一緒に世界征服を手伝うって言ってるんだからー！」

「否定はしないが美少女とは自分で言うものじゃない。そして君がボクを手伝うんじゃない、ボクに、君を手伝え、と君は言っている」

「くっ…まさか大魔王がここまで世界征服に食い付きが悪いなんて…ライラー、こいつになんとか言っちゃってよー！」

「ボクからも頼む。話が平行線だ。これではいつまでたっても話が…？」

わなわなと震え剣先をベルクロードに向けるライラ。切れ長の目にドスを効かせ睨み付ける。

「魔王貴様…貴様が勇者様を洗脳したから勇者様が…勇者様が…おのれえええっ！」

「うわっ！」

ベルクロードは振り下ろされた剣を身体をひねってかわした

「えーと…いくつか質問があるんだけど…」

「貴様と語り合うことなど何もない…」

「魔王に対しての反応としては正解だがそれはボクにとって理不尽だ。まず、君は今までの話の流れを…っ」と！

再び閃光のごとき切り払い。気が動転しているとはいえ、その一筋一筋は極めて正確に、ベルクロードを狙う。さすがに勇者のお供として旅をしてきただけのことはあった

「なんて感心してる場合じゃない…これで倒されたら、ただの勘違いで倒された大魔王として歴史の教科書に残りかねない…：そんな教科書で子供たちが教育を受けたら世の中について無常感を持った子供が育ってしまう！」

「無常感を持った子供って何…ねーベルー？」

「うん？」

いつのまにか馴れ馴れしくベルと呼ばれているのも気にせず返事を返す

「助けてあげよっか？ただし！その代わりに私の相棒として働いてくれるっていう条件付きでね！」

「いや、それならいい」

「ぶー」

「おのれ魔王！この期に及んで操った勇者様を盾に利用しようとは！」

「君は思い込みが激しく話を聞かない人だと言われたことはないか」

「貴様っ！……私の情報を、どこから手に入れたああ！！」

ああ、やっぱり言われたことがあるんだ。

激昂したライラが剣に気を込める。物質性すら伴った空気の塊がライラの剣を包み魔物の咆哮のような音をあげた。

「これは…魔法剣か？いや、違う…」

「風龍劍陣・一の剣：牙龍！」

うねるような剣捌きと切り返しを畳み掛けることによる生まれる風の刃。無数に生まれた風刃の軌跡が龍を思わせることから名付けられた秘剣である

「ってこれは…やばっ！ライラ本気じゃない!？」

考えてみたら当然の話である。ライラはルミナとは違い、ベルを仲間に引き入れるために魔王城に来たわけではない。手加減をする理由などなく、むしろ奇妙な経緯から感情を昂らせた分、これでも完全な本気とはやや離れている。

ゆえに、次の光景も不思議なことではないはずだろう。

「嘘…」

その風刃の嵐を臆さずかえって前に進み出、軽々と紙一重ですり抜けていくなどは。

「なっ…!？」

「引き下がれば引き下がるほど、風の刃は拡散して攻撃範囲を

増していく。臆病者ほど痛い目を見るといつわけだ。戦士らしい技だよ」

そう言い放ち、懐に潜り込んだベルクロードはライラの腕を取り投げ飛ばした。

「きゃあっ！」

「これで少しは落ち着いたかな」

「うわすっごー！やるじゃないベル！ライラの牙籠を一目でかわしたのなんてあんたが初めてよ！いや、私の見込みにやっぱ間違いは…」

「っ！勇者様、危ない！」

「…えっ？」

ルミナに影が落ちる。彼女の背後に、腕を銃にした巨大な金属の兵隊が立っていた。

「えーっと、これは…」

「やはりやつは魔王だ…あの圧倒的な体術に禍々しいあのからくり機械…」

「そう、からくり。ボクの魔力を込めたオートマタだ。ボクの手足となって働いてくれる…このようにね」

オートマタが一つ目を光らせ左手の銃口をルミナに向ける

「ゆ、勇者様っ……！」

ジヨロロロロ……スッ。

銃口から紅茶を出し右手に持ったティーカップに入れ差し出した。

「……………」

「……………」

「もう真面目に世界の命運をかけて戦う……だなんて空気ではなくなつてしまった。仕切り直しだ。まずはお茶でも飲んで、頭をゆっくり冷ましてくれ」

## 2話（後書き）

というわけで突っ込みをほぼ魔王に任せたまま2話目でした。ベルくんは（あくまで性格的には）スタンダードなヘタレ青年主人公になる予定でしたが、意外とマイペースっぷりが強化されたかもしれません。うーむ、長編は地の技術のボロが出るなあ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5598z/>

---

世界をはんぶんこ！

2011年12月19日01時47分発行